

「第三十九回庭野平和賞」贈呈式 ご挨拶

公益財団法人庭野平和財団 名誉会長 庭野 日鑑

「第三十九回庭野平和賞」の贈呈式にあたり、挨拶を申し上げます。

この贈呈式は、今年もオンラインでの開催とさせて頂きました。受賞者をお招きできないのは大変残念ですが、新型コロナウイルスの感染が続いていることを考慮した対応ですので、ご理解を頂きたいと思います。

本日は、このようなオンラインによる贈呈式にもかかわらず、大変大勢の方々がご参加くださいました。

皆さま、誠にありがとうございます。

今年度の「庭野平和賞」受賞者は、南アフリカ共和国の聖公会・司祭であるマイケル・ラップスレー師でございます。選考にあたられた庭野平和賞委員会の皆さんに、深く敬意を表し、お礼を申し上げたいと存じます。

只今、贈呈理由をお話し頂きましたように、ラップスレー司祭は、アパルトヘイトなどで傷ついた人々の記憶に耳を傾け、寄り添い、希望を見出していく「記憶の癒し」ワークショップ主宰されています。

その活動は、現在、世界各地におよんでおり、参加者も、差別や不正に苦しめられた人々、家庭内暴力、犯罪による暴力、あるいは政治的な暴力の被害者、退役軍人、収監者など、さまざまあります。

過酷な経験による強い精神的ストレスは、人によつては一生ぬぐい切れないほどの心の傷を残します。しかも多くの場合、その苦しみ、悲しみは、他者に伝えられることはなく、心の内側にしまい込まれたままです。

日本での象徴的な例をお話したいと思います。第二次世界大戦末期、広島と長崎に原子爆弾が落とされたことは、ご存知の通りです。

その戦禍から、今年で七十七年もの年月が経ちます。ところが、いまだに被

爆体験を一切語ろうとしない人が大勢おられます。それほどまでに辛い経験をされ、深い心の傷を負い、それが癒されないまま、今日に至っているということがあります。

「記憶の癒し」ワークショップは、そうした耐えがたい記憶に苦しむ人々に、過去の出来事を安心して話すことができる機会と場所を整え、提供する活動といえます。

そこには、信頼できる人々がいて、信仰に根ざした温かい雰囲気が醸し出され、その中で、互いに自らの体験を語り、傾聴し合うのであります。

人の心を癒す中心には、主に二つの事柄があるといいます。

一つ目は、自分に起きたことの恐ろしさを認められ、理解されることです。

もう一つは、自分の安否を気遣ってくれる人々の存在を身近に感じられることであります。

「傷ついた過去の出来事を、自らの物語として語ることで、まるで解毒するような働きとなり、癒しへと促すことができる」とラップスレー司祭はいわれています。

このラップスレー司祭の言葉に触れて、私は、自らの教団の基本的な修行の一つである「法座」を思い起こしました。

法座は、そもそも仏教の開祖である釈尊と、苦悩している人との対話が原型と申せます。法座主と呼ばれるリーダーを中心に、七、八人から十数人が一つの車座をつくり、日常生活におけるさまざまな問題や悩みを話し合います。

法座は、苦しみ、悲しみを分かち合う場です。苦悩を打ち明けた人に、他の参加者が寄り添い、励まし、共に仏教の教えに沿った解決への道を学んでいくのであります。

「記憶の癒し」ワークショップとは、異なる面もあると思いますが、基本的には同じ願いを持つた活動であると受けとめております。その意味からも、私は、ラップスレー司祭の活動に深く共感するものであります。

さて、ラップスレー司祭は、「記憶の癒し」が、なぜ必要なのかについて、こ

うおっしゃっています。「過去の被害者が、将来被害を与える者になることは、あまりにも容易だからである」と。

一般的には、不当な仕打ちを受けたり、辱めを受けたりすると、相手に対して怒りや怨みの心を起こします。その心が高じていくと、怨みに怨みで応じ、暴力に暴力で対抗するようになり、やがては、絶えることのない不信と争いの連鎖に陥っていくのであります。

初期の仏典である法句經に、「怨みは怨みによつて報いれば、ついに止むことはなく、慈悲によつてのみ止む。これは永遠の真実である」という教えがあります。

この慈悲の精神をもつて、怒りや怨みの連鎖を断ち切り、共に生きる世界を築くことこそ、われわれの悲願であります。

仏教は、慈悲の教えともいわれます。慈悲は、簡潔に表現すれば、「人に安らぎを与えてあげたいと心から願う」こと。あるいは「相手の苦しみを取り去つてあげられたらいなと心から願う」ことであります。そして、この慈悲は、敵も味方もなく、全ての人々に向けられます。

このような慈悲の精神、あるいはキリスト教の説く愛の精神を、現代社会の中で実現したのが、私は、「記憶の癒し」ワークショップであると思つております。

改めて深く敬意を表したいと存じます。

いま私どもは、ロシアによるウクライナ侵攻という大変厳しい現実に直面しています。解決には、多くの時間が必要でしようし、たとえ双方の攻撃が止んだとしても、人々の心には、恐怖や不安、怒り、憎しみといった戦争の記憶が残り続けます。

ラプスレー司祭は、次のようにいわれています。

「戦争と紛争のすぐ後には、私たちを分断する政治的、経済的な問題の公正な解決がなされなければならない。しかし、これと補い合うように、私たちは、紛争のもたらした心理的、感情的、精神的な影響に取り組まなければなりません」。

「このことは、宗教者のみならず国際機関やNGOなど全ての人々が、心すべきことあります。」

「記憶の癒し」ワークショップでの経験や知見を、今後もより多くの人々と分かち合い、共に生きる世界に向け、リーダーシップを發揮してくださることを念願しております。

ラプスレー司祭は、強い信念を持った方ですが、同時にユーモアに富み、大変親しみやすいお人柄であると伺っています。いつかお会いできる日を、本当に楽しみにしています。

本日の贈呈式を契機として、ラプスレー司祭の願いと行動を、より多くの人々が共有することを期待し、またご健康で、これまで同様にご活躍くださることを祈念して、挨拶と致します。

ありがとうございました。